

イチゴ炭疽病を防ぐため、育病期からの管理を徹底しましょう！

イチゴ炭疽病は、主に育苗期に高温多湿の条件下で発病が増加します。本病は苗不足や本ぼでの枯死株発生を引き起こすため、いちご栽培における重要病害です。

7月の巡回調査の結果、一部のほ場で本病の発生が確認されました。

また、気象庁の1か月予報（7月10日発表）によると、向こう1か月の平均気温は高い見込みであり、本病の発生に好適な条件のため、今後の発生増加が懸念されます。

感染した株は防除による回復が困難なため、予防を中心とした対策を行いましょう。

1 被害症状

- ・葉に直径 2～3 mm の薄墨色の丸い斑点が生じる（写真1）。
- ・ランナーや葉柄に黒色で陥没した紡錘形の病斑を生じ（写真2）、進展すると折損する。さらに多湿条件では鮭肉色の孢子塊を形成する（写真3）。
- ・クラウンにまで進展すると、クラウンの外側から内側にむけて褐変し（写真4）、最終的には株が萎凋、枯死する。

2 伝染方法

- ・伝染源は潜在感染した（病原菌が感染しているが症状を示さない）親株や、土中に残った前作の被害残さ、親株・育苗に使用する各種資材である。これらに形成された孢子が降雨や頭上かん水による水滴のはね上がりにより飛散し、伝染する。



写真1 薄墨色の丸い斑点(葉)



写真2 陥没した病斑(葉柄)



写真3 病斑上の鮭肉色の孢子塊



写真4 クラウンの褐変

3 防除対策

- (1) 胞子の飛散を防ぐため、点滴チューブの使用等、水のはね返りのない方法でかん水する。
- (2) 葉の濡れ時間が長いほど発病しやすいため、かん水は午前中に行い、夕方までに葉が乾いた状態になるよう、かん水の時間や量を調節する。
- (3) 発生前から薬剤を定期的に予防散布する（表1）。
- (4) 薬剤抵抗性の発達が見られるため、薬剤選定の際には、イチゴ炭疽病薬剤感受性検定結果を参照する。
- (5) 発病株は早急に抜き取ってほ場外へ持ち出し、嫌氣的発酵処理※後に処分する。

※罹病残さを肥料袋等に詰め、残渣重の半分の水を添加し、袋内の空気を抜いて密閉し日当たりのよい野外に放置する

- (6) 発病株の周辺株は、潜在感染のおそれがあるため、定植苗として使用しない。また、感染拡大防止のための重点的な薬剤散布を行う。
- (7) 窒素肥料を多用すると発病しやすいため、適正な施肥を行う。
- (8) 定植前に本ぼの土壤消毒を行う。

※詳細は病害虫防除対策のポイント No.21 イチゴ炭疽病を参照。

表1 イチゴ炭疽病に登録のある主な薬剤（令和7年(2025)年7月15日現在）

薬剤名	希釈倍数 (倍)	使用時期	本剤の 使用回数	FRAC コード	有効成分	有効成分の 総使用回数
キノンドーフロアブル	500～800	育苗期	3回以内	M 1	有機銅	3回以内
ベルコートフロアブル	1000	育苗期（定植前）	5回以内	M 7	イミノクタジンアルベシル酸塩	10回以内 ¹⁾
ファンベル顆粒水和剤	1000	収穫前日まで	3回以内	M 7 11	イミノクタジンアルベシル酸塩 ピリベンカルブ	10回以内 ¹⁾ 3回以内
サンリット水和剤	2000	収穫前日まで	3回以内	3	シメコナゾール	3回以内
セイビアーフロアブル20	1000	収穫前日まで	3回以内	12	フルジオキシニル	3回以内
タフパール	2000～ 4000	育苗期～収穫前日 まで	－	B M 2	タラロマイセス フラバス	－

1) 育苗期は5回以内、本ぼでは5回以内。

詳細は、農業総合研究センター 防除課（Tel 028-665-1244）までお問合せ下さい。
病害虫情報発表のお知らせは「栃木県農政部 X(@tochigi_nousei)」、
[農業総合研究センターホームページ](#)でもご覧いただけます。



～栃木県からのお知らせです～

6月～8月は、「栃木県農業薬害防止運動」の実施期間です。



- ① 安全作業の第一歩！ 農薬散布時の身支度は万全に！
- ② いつものチェック！ 農薬使用の際は、ラベルをよく読み正しく使いましょう！
- ③ 農薬散布のその前に！ 風量や風向きに注意して、飛散防止に努めましょう！
- ④ 周辺への配慮！ 住宅地等でやむを得ず農薬を使用する際は十分に配慮しましょう！
- ⑤ 農薬散布のその後に！ 防除器具の洗浄も欠かさずに行いましょう！